

不溶性 Cs 粒子企画にあたって

五十嵐康人

いからし やすひと
京都大学複合原子力科学研究所

「喉元過ぎれば熱さを忘れる」とはよく言ったもので、歴史的な事件や災害を社会的な記憶として残し、その後の対策に資するのは並大抵のことではない。現今のコロナ禍への対策も考えてみれば、2000年代初期にはSARSが、2010年代初期にはMERSの感染拡大があり、見本はあつたはずである。やむを得ない側面はあつたろうが、現今の後手後手感や右往左往感は、「喉元……」で危機管理の社会的な蓄積が飛んでしまったことを意味してはいまいか。古くはスペイン風邪だろうが、故人となった筆者の祖父母や両親からも話を聞いた覚えがない。記憶の片隅に残るのは子ども時代の香港風邪やソ連風邪だ。つまり、一般個人の記憶は曖昧さもあり、さらに人々が故人となれば速やかに失われ、ほとんどの人が目にしない文書か、ごく限られた専門家にしか知見が残らない。災厄に関する「社会的な経験・知」の蓄積とその継代は本当に困難と言える。先の大戦すら例外ではなかろう。また、災厄の中で人々の口に上る「明けない夜はない」は筆者も好む言葉なのだが、他方、暮れない昼もなく夜は必ずやってくる。「嵐は必ず過ぎ去る」が、再来もほぼ間違いない。「禍福はあざなえる縄の如し」であろう。その意味では災いに備えることに躊躇いは無用といえる。それにしても「安全文化醸成」や「リテラシー醸成」は原子力や防災・リスク分野でよく語られるが、現職となって以降、より一層手ごわく感じる。もっと根本的な知や安全文化の構築はできないものか、模索の連続である。

本シリーズでは、こうした個人的な動機も背景に編集部からの強い要望を受け止め、早9年の歳月が経過した東京電力(株)福島第一原子力発電

所(福島第一原発)事故で放出された放射性セシウム(Cs)を含むシリカガラスの固体微粒子：通称セシウムボール(不溶性放射性微粒子、CsMPなどの呼称も用いられるが、本稿では「不溶性Cs粒子」とする)を扱い、将来の核災害——決してあってほしくないが——、その備えとしてこの間に明らかにできた知見を風化させず社会と共有していきたい。ぜひ得られた知見を教訓として活かしてもらいたい。そしてここには究明しつくされていない領域が残っている。

しかし残念なことに、コロナ禍に対しても同様だろうが、日本では危機管理への対応だからと言って基礎研究が人員・予算ともに特別に優遇を受けることはなく、このシリーズで示される知見のほとんども、個々の研究者が他分野と競合しつつ研究資金を確保し(あるいは手持ちのわずかの研究資金で)、最新の技術や解析手法を適用して得たもので、文字通り労苦のうえで獲得された成果であることを述べておきたい。

●「セシウムボール」とは

最近 Wikipedia をのぞき見して驚いた。「セシウムボール」が相当の分量でしっかりとした記事にされていた。発見報告¹を世に問えたのは2013年の夏だったように記憶するが、新規に見出した現象であり、当時は「謎の」とか「未知の」などの形容詞がつくことにさほど抵抗感はなかった。がしかし、それから5、6年以上経過してもなお、そうした形容詞が付され奇をてらった扱いの報道が行われることには違和感がある。研究者は科学的な光をあてることに努力してきたからである。そのことも本シリーズに記事を集めようという動機になっている。では、「セシウムボール」とは